

観光都市におけるイメージ認知／保全プロセスの比較研究

Comparison Study on the Process of Brand Image Construction and Regional Resource Protection in Sightseeing Area

学籍番号 096772
氏名 丸上 雄哉 (Yuya, MARUGAMI)
指導教員 清家 剛 准教授

1. はじめに

1.1 研究の背景

少子高齢・人口減少社会を迎えた日本において、観光は地域経済を活性化し、街に対する誇りや愛着を涵養する手段として注目されている。観光白書によれば、平成20年度における国内旅行消費額は23.6兆円、生産波及効果は51.6兆円（国内生産額の5.3%）であり、雇用誘発効果も含め、日本経済に与える影響は大きい。現在、日本ではビジット・ジャパン・キャンペーンの展開や、中国人の個人向け観光ビザの解禁等、観光立国に向けた動きが活発になっている。

観光客誘致のためには、日本らしさや個性となる地域資源を活用し、観光都市としてのブランディングを進める必要がある。しかしながら、観光資源が、各観光都市において持続可能な形で利用されているとは限らない。例えば、鹿児島県屋久島町では、世界遺産登録を契機に観光都市としてのブランドが向上し、観光客が急増した。これにより島内経済は潤ったが、登山道におけるし尿問題や植生（屋久杉の根）の踏み荒らし問題が生じた。観光振興と資源の保全がトレード・オフの関係に置かれた典型例である。

こうした問題は、観光立国を目指す動きの中で、今後さらに増加するものと推測される。従って、これまでに観光資源の危機・問題に直面してきた観光都市の対応と結果を観察し、今後の観光計画に活かしていく必要がある。

既往研究では複数事例を比較する論文は少数であった。また、本研究の特色である、観光都市のイメージ認知を取巻く人・社会・資源の変容に着目した研究、ブランディングと資源破壊過程を結びつけて追った研究は見られなかった。

1.2 研究の目的

以上を踏まえ、次の研究目的を設定した。

- ① 資源的危機に直面した観光都市の変容事

例の収集・全容把握

- ② 観光都市のブランディング・資源保全プロセスの構造化

これらにより、観光都市のブランディングのあり方を提示するとともに、地域の特性を活かし、魅力と持続性を有した観光都市の構築に寄与することを最終的な目的とする。

1.3 研究の方法

目的達成に向け、現地調査、ヒアリング、資料・文献調査により情報を収集した。個別事例については a)観光都市としての盛衰状況とその背景となった出来事・施策・活動、b)観光振興を進める中で直面した環境・資源問題とそこでの対応・結果を整理した。その上で対象全体として、c)傾向分類に基づくブランディングや資源保全の現状分析 d)対象観光都市で観察される普遍的要素の抽出と分析をした。傾向分析には社会ネットワーク分析（行列計算）を用いた。

2. 研究対象とその概要

2.1 研究対象の選定基準

研究対象は、次に示す基準により選定した。

- ① 地域資源を核とした観光都市
- ② 観光産業への依存が大きい場所
- ③ 開発・利用・保全など人間が観光資源に対して影響を与えた場所
- ④ 環境・社会問題を内包した観光都市

2.2 選定した観光都市と観察要素の概要

表1に研究対象として選定した全国10ヶ所の観光都市と、各観光都市が経験したイメージ認知・強化のきっかけ、資源の危機・問題、主な対策・対応、その他についてまとめた。

次節に白骨温泉の事例分析を示す。また、他の観光都市についても同様の調査を実施した。

3. ケーススタディ

3.1 白骨温泉の概要とブランドの変遷

白骨温泉（長野県松本市）は山に囲まれ、湯川

の流水音が常に響いている。集落は、温泉宿が10軒、日帰り入浴施設が2軒、土産屋・蕎麦屋・案内所が各1軒、その他に空き屋や物置で構成され、民家は無い。交通アクセスも悪い。こうした立地構成上に、炭酸水素塩泉という良好で珍しい温泉が沸いていることから「秘湯」と呼ばれている。源泉は透明で時間が経過すると白濁する性質があり、白骨温泉のイメージを構築している。

表1 研究対象とした観光都市と着目要素

観光地名	イメージ認知・強化のきっかけ	資源の危機・問題	主な対策・対応 (問題発生前からの取組みも含む)	観光客推移の形 / 最盛年 現在の状況 / その他
白骨温泉	・ 秘湯ブーム (朝日新聞) ・ 温泉偽装問題	・ 白濁温泉の枯渇 ・ 温泉偽装問題	・ 内湯巡り ・ 温泉表示認定制度	・ 山型 / 2000年 ・ 転換・過渡期
柳川	・ 映画「からたちの花」 ・ 北原白秋「大柳川都市計画論」 ・ 映画「柳川堀割物語」	・ 堀割の水質悪化 ・ 堀割埋立て計画	・ 水路美化 / 清掃活動 ・ 市職員による啓蒙活動	・ 増加継続型 / 2004年 ・ 繁栄期
ニセコ山系	・ 豪州でのネットロコミ ・ 外国人観光客の急増 ・ 地価上昇率日本一	・ 乱開発 ・ 円高 (観光客減少の懸念)	・ 準都市計画区域の設定 ・ 大規模リゾート開発 ・ 母国語によるケア	・ 増加継続型 (内訳変化) / 1990年 ・ 成長期
伊香保温泉	・ 温泉都市計画 (石段街の形成) ・ 石段の延伸 ・ 「黄金の湯」・「子宝の湯」	・ 温泉使用の利権問題 ・ 低価値 / 循環湯の「天然温泉」表示	・ 白銀の湯の発見と利用 ・ ※黄金の湯に比べて低価値 ・ 証明書の発行	・ 山型 / 1991年 ・ 転換・過渡期
摩周湖	・ 透明度世界一 (1931年での記録) ・ 布施明「霧の摩周湖」	・ 透明度の低下	・ マイカー規制 ・ ※無根拠とする批判。 ・ ていかげえこまち協議会	・ 山型 / 1991年 ・ 衰退期 / 中国における道東ブーム
尾瀬	・ NHKラジオ「夏の思い出」 ・ 木道敷設 ・ 自然保護運動の発祥 / CSR	・ 水力発電ダム計画 ・ 道路建設問題 ・ ブームに伴う裸地化	・ 複線木道の敷設 ・ マイカー・バス通行規制 ・ 自然保護運動 / 募金 / 登録	・ 複数山型 / 1996年 ・ 成長期 ・ ※2009年は減少
足尾銅山	・ 足尾銅山鉱毒事件	・ 鉱毒のイメージ ・ リピーター獲得の失敗と観光客の継続的減少	・ 環境教育施設の設置 ・ 保安林解除 / 伐採 ・ 史跡指定 / 名数選等	・ 衰退継続型 / 1984年 ・ 衰退期 / 足尾銅山観光は1980年にオープン
鳥取砂丘	・ 砂丘保存運動 ・ 天然記念物 / 国立公園指定	・ 農業利用 / 砂防目的の植林 ・ 雑草繁茂と煩雑な除草手続き ・ 上記に伴う砂停滞・景観変化	・ 天然記念物 / 国立公園指定 ・ 保安林解除 / 伐採 ・ 除草作業	・ 複数山型 / 1972年 ・ 転換・過渡期
琴引浜	・ 三輪茂雄氏の訪問 ・ 町や国の文化財指定 / 名数選 ・ 事故や保護活動のメディア報道	・ 重油流出事故 ・ リゾート開発計画 ・ 草 / 廃棄物 / 灰による汚染	・ 鳴き砂を守る会の活動 ・ 禁煙ビーチ化 ・ 名勝 / 天然記念物指定	・ 複数山型 / 1990年 ・ 衰退期 ・ ※近年は衰退傾向が続く
屋久島	・ 縄文杉の発見 ・ 屋久島環境文化村構想 ・ 世界自然遺産登録	・ し尿 / コミ問題 ・ 屋久島の根の踏み荒らし ・ 猿 / 鹿害	・ エコツーリズム / 環境学習 ・ 利用調整 / デッキ等の整備 ・ 各種登録 / 指定 / 募金	・ 増加継続型 / 2007年 ・ 転換・過渡期 ・ ※現在の減少は一時的という見方

3.2 白骨温泉ブランドの変遷

白骨温泉ブランドを取巻く出来事と観光客数の経年変化を図1にまとめた。

白骨温泉は、中里介山の小説『大菩薩峠「白骨の巻」』により、広く知られるようになった。その後、観光客数は交通基盤の整備や旅館の通年営業化により徐々に増加していき、1980年代前半からの秘湯ブームにより急増する。ブーム中は案内所や遊歩道など、白骨温泉内の基盤整備が進んだ。しかしながら、景気後退等の影響から、2000年を境に観光客数は減少に転じた。加えて、2004年7月には、入浴剤使用が発覚し、その傾向に拍車がかかってしまった。以降、白骨温泉を訪れる観光客数(入込数)は、年間19

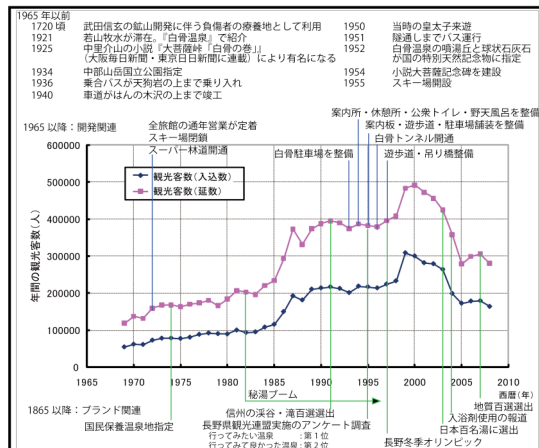


図1 白骨温泉ブランドを取巻く出来事と観光客数の経年変化

3.3 白骨温泉のイメージ変容プロセス

白骨温泉のイメージを変化させた社会・潜在的要素とその構造を図2にまとめた。

白濁で有名な白骨温泉では、朝日新聞発の秘湯ブームにより観光客が急増した。しかし、白骨温泉は中部山岳国立公園に指定されており、また源泉を持つ旅館の既得権保護(源泉枯渇の回避)の観点から、新たな源泉採掘は不可能である。こうした事情の一方、ブームに対応するかたちで各旅館が湯船の拡張・増設をしたことにより、温泉の加水や他源泉の併用が必要になった。湯船の拡張は、お湯と空気との接触面が広がることも意味しており、お湯が冷めやすくなったことで、加温も必要になった。また、全国

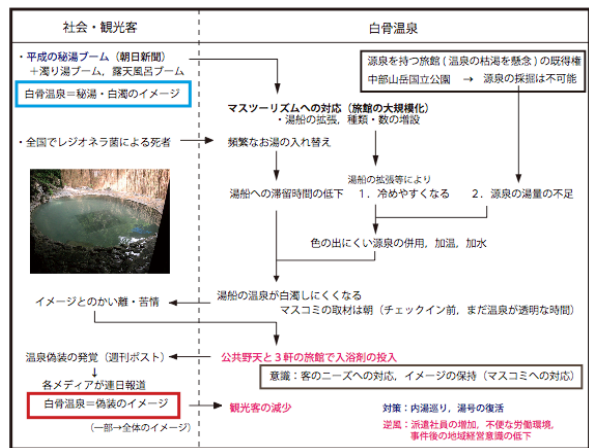


図2 白骨温泉のイメージを変化させた要素とその構造

的なレジオネラ菌対策を背景に、お湯の頻繁な入れ替えを余儀なくされ、滞留時間が低下した。

温泉の①加水、②白濁の薄い源泉併用、③加温、④滞留時間の低下、は温泉の白濁を薄くする原因となり、観光客からの苦情が増えた。加えて、マスコミの取材は、旅館の営業サイクルの関係上、朝に集中する。朝はお湯を入れ替えたばかりであり、湯船の温泉は透明である。こうした事情から、イメージ保持に苦慮した組合(公共野天)と三軒の旅館は入浴剤を入れるようになった。この様子が週刊誌によって明るみとなり、温泉偽装問題として各メディアが連日報道した。結果、偽装のイメージを持たれるようになり、白骨温泉は大きなダメージを受けた。

白骨温泉は、オーバーユースによって提供できる資源の質が低下し、イメージの悪化と観光客数の減少を招いた事例であるといえる。

4. 分析結果

4.1 観光客の増減が生じる要因

ケーススタディでは、以下の要因により観光客数に変化が生じることを確認した。

- ① 気候的要因：気温、天候と交通への影響等
- ② 基盤的要因：交通・施設の新設、料金改定等
- ③ 社会経済的要因：景気、ブーム、風評等
- ④ 資源環境的要因：資源環境の質変化、新資源発掘、利用規制等
- ⑤ ブランド的要因：

- a) 名数選選出、世界遺産登録、国立公園指定、文化財登録等による「冠」ブランドの獲得。
- b) ドラマ、映画、ニュース、地域活動、イベント、歴史等による「注目」ブランドの獲得。

4.2 観光都市のイメージ認知/保全プロセス

ケーススタディを基に、年代や観光都市の盛

衰状況に応じた資源の危機・問題、民間・市民活動、基盤整備、公的施策、ブランディング、イメージ認知・強化の流れを図3に整理した。

観光都市のイメージを認知・強化するような冠ブランド(国立公園指定、文化財登録等)の獲得は観光都市の創成期である場合が多いが、近年も世界遺産登録や名数選等の冠ブランドが出現している。

一方、注目ブランドの獲得は観光都市の時期区分に関係なく出現する。中には、テレビの普及以前にラジオや文学作品によって観光都市のイメージが構築・認知され、現在でも受け継がれているものもある。近年ではインターネットのロコミや、企業のCSR、新資源の発掘によって観光都市の資源の認知が進むケースもある。

また、観光都市の抱える危機・問題はその対策手法を基準に、①断続的問題、②突発的問題、③オーバーユース的問題の3種類に分類できる。

4.3 観光都市における資源問題・危機回避手法

断続的な問題(柳川：堀割の水質悪化、摩周湖：透明度低下、鳥取砂丘：草原化)の場合、原因の解明が必要になる。鳥取砂丘では環境省の調査により、草原化の原因が植林による砂の動きの低下と河川護岸による砂の供給量の減少にあることを特定した。これに基づき、国立公園の特別保護地区内の除草作業に許可を出したり、植林地の伐採が進んだ。除草作業は、市民活動や企業のCSRとして実施する例が見られる。

突発的な問題(柳川：堀割埋立て計画、尾瀬：ダム・道路建設計画、琴引浜：重油流出事故等)に対しては、市民活動・啓蒙活動によって環境改善したり、開発計画を回避してきた。こうした活動はメディアの関心を集め、それ自体が観光都市の

		各項目の出現時期と内容の変化					
民間・市民活動	I 断続的に存在	地域資源としての認知 / 行政からの引き継ぎ					
	II 事故突発的計画	地域資源としての認知 → 開発計画の中止：活動・団体の終息 or 存続 → 新たな危機の発生：団体の活動内容の拡大・変化					
	III オーバーユース観光的要求	ブームキャンペーン以上の客数問題の表面化 → 利用制限 / 回復事業等 → CSR					
資源の認知・イメージの付与		ブーム/映画/ラジオ/伝説/楽曲/国立公園指定/文化財指定をきっかけとする資源の認知・イメージの確立 → マイナスイメージの付与 → 世界遺産/映画/環境学習/CSR事故/活動によるイメージ付与					
ブランディング		映画/テレビ/ラジオ/楽曲/文学/記録天然記念物/国立公園/国民保養温泉地 → 百選/映画/テレビ/楽曲 → 百選/世界遺産/地域遺産/楽曲海外映画/天然記念物/インターネット					
公的施策		国立公園指定/文化財指定 → 自然公園/文化財を保護し、地域の個性を強化する計画/事業/イベント/条例/設立 → 世界遺産/ラムサール条約景観保護/地域連携推進施策					
開発・基盤整備	外部からのアクセス	外部からのアクセスを可能にする道路/鉄道/飛行場 → 大都市圏からのアクセスを容易にする鉄道(新幹線・エクスプレス)/航空定期便等					
	内部の施設整備	環境保全&観光目的施設(木道/デッキ)整備 観光の基盤となるスキー場/展望台/木道 → スキー場/テーマパーク/公共浴場/宿泊施設 観光地内部の基盤整備(町道/遊歩道/街並整備等) → 環境/文化/情報発信施設					
観光都市の時期区分		創成期	成長期	繁栄期	衰退期	近年転換期/第2成長期	

図3 観光都市のイメージ認知/保全プロセス

注目ブランドになることもある。琴引浜では、「琴引浜の鳴り砂を守る会」が中心となってリゾート計画の回避や砂浜の美化に努めてきた。特にナホトカ号事故の際の重油回収活動は報道で大きく取り上げられ、琴引浜や鳴き砂の認知も高まった。

オーバーユースにより生じる問題（白骨温泉：白濁の薄化，ニセコ：乱開発，伊香保温泉：温泉表示問題，尾瀬：裸地化，屋久島：し尿問題等）に対しては，①自主規制，②環境施設整備，③エコツーリズムによる解決が見られた。

ニセコ（倶知安町とニセコ町）は不動産投資の過熱に対応して準都市計画区域を指定した。また，白骨温泉や伊香保温泉では，使用する源泉の量を決め，当該源泉の採掘量を一定に保っている。尾瀬では東京電力の CSR として複線木道の敷設やエコトイレが整備されている。CSR の様子はテレビ CM でも放送されていることから，尾瀬や東京電力の認知やブランド強化にも繋がっている。観光都市の場合は社会の関心も高く，観光都市の環境保全と CSR との相性は良い。屋久島ではエコツーリズムの積極的な導入により，観光振興と同時に観光客のマナー向上や環境保全に成功した。

5. 観光都市におけるブランディングのあり方

国または世界的な環境施策の指定・認定は，資源と地域の価値の裏付けを得ることに等しい（表 2）。このため，観光都市は国立公園等の冠獲得に躍起になっている。しかし，こうした

冠ブランドは年代によって種類を変化させつつも，現在は乱立傾向にある。画一的な法律による保護は個別の資源特性に対応できず，形骸化やオーバーユースなど新たな問題を発生させた。

今後は先進事例の教訓を活かし，観光資源の危機や問題の発生を前提として，図 4,5,6 に示したような持続可能な資源利用循環を再構築していく必要がある。同時に，観光都市の陳腐化を防ぎ，発展を続けるためには，循環を保持した上での利益の最大化の一方で，資源の更新・補強が必要になる。ニセコのラフティングや屋久島のエコツアーのように，資源の新たな価値の発見・活用を進めるとともに，そこでも新たな資源利用循環を構築していく必要がある。

そして，環境・ブランド・観光の相互関係を意識し，供給源，生態系，観光・交流等，資源を取巻くあらゆる要素の循環構造に配慮した保護を進めるべきである。資源の形・質・意味を一体的に保全する柔軟かつダイナミックな施策を講じることで，永続的な循環に代えていく必要がある。その循環構築と積み重ねこそが，今後の観光都市ブランディングのあり方だと考える。

主要参考文献

- 1) 敷田麻実「観光による持続可能な地域資源の活用戦略」,2010
- 2) 井上美奈,伊藤香織「都市ブランディングの現状と可能性 日本の先進事例を通じて」,2006

表 2 観光都市における環境施策（ケーススタディより抽出）

施策	効果			観光地に適用する場合に観察される課題・問題点	施策	効果			観光地に適用する場合に観察される課題・問題点
	環境保全	観光振興	ブランド			環境保全	観光振興	ブランド	
世界遺産条約	○	○	○	観光客の増加に伴うオーバーユース、資源の劣化。また、それを懸念する自然保護派からの反対運動や、土地利用制限を嫌う市民の反対運動などが発生。	景観条例・建築協定・デザイン規制	○	△	○	観光振興のために、市民や所有者の経済・管理・生活的負担が大きくなる。
ラムサール条約	○	○	○		エコ施設整備	○	○	○	
世界ジオパークネットワーク登録	△	○	○		募金・協力金	○	○	○	観光客の負担増加。割高感。
自然保護法（国立公園指定）	○	○	○	特別保護地区内でも入浴が許可されるなど、米国に比べ、日本の国立公園制度では観光利用の比重が大きい。国立公園に指定されていても、国有林では地権区分及び林野庁（地主）の意向次第で森林伐採が可能。	植栽・清掃・環境改善活動	○	△	○	
文化財保護法	○	○	○	形骸化。高齢化（重要伝統的建造物群）。	植林・記念植樹	○	○	○	
保護林指定（森林生態系保護地域指定）	○	○	○	国有林野事業の財政難に伴う国有林売却の懸念。	環境教育・研究・エコツアー・啓蒙・ガイド	○	○	○	ガイドとのトラブルの発生。ガイドの質の確保。
（原生）自然環境保全地域指定	○	○	○	国指定の場合、①指定条件の厳しいこと、②土地利用に制限を受ける、③指定実績や認知度の低さから観光客誘致が期待できないなどから、市町村が指定に対し熱心ではない。	市民団体・NPO・財団の結成や連携	△	○	○	
都市計画・憲章・構想	△	○	○		CSR	○	△	△	利益幅の小さな企業における CSR 活動が進んでいない。
立入・車・経路・資源使用規制	○	×	○	観光振興のために、市民や所有者の経済・管理・生活的負担が大きくなる。	特区・特例	○	○	○	環境保全に寄与するかは、制度の使い分け策。近年は地方自治体の特区制度を導入しようとする意欲が低下気味。

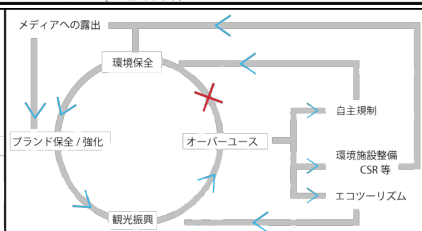
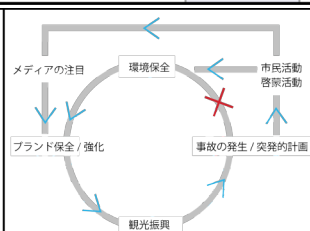
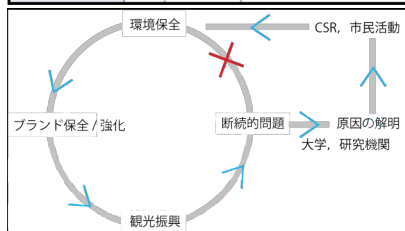


図 4 持続的資源利用策 1 (断続的問題)

図 5 持続的資源利用策 2 (突発的問題)

図 6 持続的資源利用策 3 (overuse 問題)